

## 高等学校芸術科書道における鑑賞指導とその展開

下田章平\*・齋木久美\*\*

(2013年9月17日受理)

Appreciation Guidance of Calligraphy and its Practice for Senior High School Arts Courses

Shohei SHIMODA and Kumi SAIKI

キーワード: 新学習指導要領, 鑑賞指導, 書道Ⅱ, 篆書, 美術館, 高大連携

本稿は、芸術科書道における鑑賞指導の現況を踏まえ、その改善を期して、新学習指導要領における鑑賞指導と評価について整理した上で、下田が勤務する茨城県立水戸第二高等学校(以下「水戸二高」)の芸術科の概要と新学習指導要領に基づく鑑賞指導の試案について提示し、それに関する高大連携のあり方について報告することを目的とする。

まず、新学習指導要領における鑑賞指導と評価について整理し、水戸二高でのこれまでの実践を踏まえながら、書道Ⅱにおける鑑賞の評価規準について新学習指導要領や解説をもとに設定し、平成26年度以後に運用する表現と鑑賞を有機的に結びつけた試案1「小臣餘儀尊を臨書しよう」(『書道Ⅱ』, 47頁, 東京書籍)と特に鑑賞のための時間を設定した試案2「美術館で書道の作品を鑑賞しよう」(自主教材)を提示することができた。

次に、高大連携と大学の授業改善の取り組みとして、学生が学習者となり、どのように鑑賞指導を行うべきかを考えさせていく模擬授業を行い、学生の感想からその成果を確認することができた。また、大学の授業においても書の「受け手」の養成を意識する必要があることが明らかとなった。

### はじめに

高等学校学習指導要領(以下「新学習指導要領」)が平成21年3月に公示され、平成25年4月1日の入学生から年次進行により段階的に適用されており、すでに書道Ⅰでは運用されている<sup>1)</sup>。新学習指導要領の芸術科書道では鑑賞指導が従前以上に重視され、それに対応した授業の展開が各学校で求められることになった。

ただし、鑑賞指導自体はこれまでも指導事項として挙げられ、昭和26年の『高等学校学習指導要領芸術科書道編〔試案〕(抄)』<sup>2)</sup>にすでに見える。それには、芸術科書道学習指導の具体的目標として、「情緒的生活を豊かにする一つ的手段として、書道に対する鑑賞能力を高める。」とあ

\*茨城県立水戸第二高等学校 \*\*茨城大学教育学部

り、また「書道の学習をとおして、望ましい生活態度を身につけ、国民道徳を高めることに寄与する。」ことの一環として掲げられている。加えて新学習指導要領の指導計画や指導事項も共通点が多く、現在の鑑賞指導の骨格は戦後すぐに形成されていたと見て差し支えない。

また、実際の鑑賞指導の実践に関しては、書写・書道の教科書の執筆にも携わった今井<sup>3)</sup>が、昭和51年の論考で、次のように指摘する。

高校の教科書を見よう。東洋独自の芸術を理解するためにはあまりにも貧弱ではないか。……教育の現場の経験は私は持たないが、現在は少し熱心な学生生徒は創作とか展覧会に走って教師もそのように指導する。書を鑑賞し、書を通じて文化を考える方向へ進むことはまれである。また、書を文化としてとらえるには教科書があまりに貧弱だし、その貧弱さは現場の指導方向の反映、といった形で悪循環している。書くことのみによる指導からは受け手が生まれないのは道理である。

これは当時の「書くこと」に主眼を置いた書道教育の現状を指摘した上で、鑑賞指導を通じた書の「受け手」の養成の必要性を説いたものといえる。平成元年の論考で久米<sup>4)</sup>も「ともかく、これまでの書道科教育では、この鑑賞の学習指導に手ぬかりが多かったと思う。技法を重視するあまり、対象の鑑賞を、上滑りのきれいごとに終わらせて、技法練習への道を急いだり、もたつきを恐れて、指導者側からの一方通行で片づけたりしがちではなかったか。芸術教育の核となる「感じる心・見る心」のはぐくみを担うこの鑑賞学習への手ぬかりは、厳しく反省されなければならない。」「書写・書道における鑑賞指導は、将来の社会生活の場で当面する鑑賞活動への入門である。」と同様の指摘をしている。さらに、萱<sup>5)</sup>は平成17年の論考で、高等学校において鑑賞は「制作活動のための鑑賞」として位置づけられがちであり、生涯にわたって芸術を愛好する心情を多面的に育てるのは難しく、表現行為に依拠しない鑑賞の意義も検討する必要があると論じている。ここでは表現と鑑賞を有機的に関連づけた指導だけでなく、生涯学習を見据えた鑑賞能力の育成を指摘している。上掲の指摘のように、芸術科書道では表現中心の指導が行われ、たとえ鑑賞指導を行ったとしても生涯教育を見据えた指導が行われていないという状況が長きにわたって存在しているといえる。また、このような状況の中でも鑑賞指導の実践研究の蓄積はあるが<sup>6)</sup>、現時点で新学習指導要領を見据えたものはほとんど見られない。

そこで、上記の鑑賞指導の現状の改善を期して、まずは新学習指導要領における鑑賞指導と評価について整理し、下田が勤務する水戸二高の芸術科の概要と新学習指導要領に基づく鑑賞指導の試案について提示する。また、これをもとに実践を行った高大連携のあり方について報告する。なお、本稿の執筆に関して、はじめに・第1章・第2章・おわりには下田、第3章は齋木が担当した。

## 1 新学習指導要領の芸術科書道に見える鑑賞指導とその評価<sup>7)</sup>

新学習指導要領における芸術科書道Ⅰ～Ⅲの目標は、生涯学習を視野に入れつつ、書の伝統と文化に対する一層の理解を深めることを求めており、その目標を達成するために、鑑賞指導がこれまで以上に重視されることになった。これは平成11年3月に公示された学習指導要領（以下「現行学習指導要領」）において、生涯学習に関しては、芸術科の目標並びに書道Ⅲの目標に、書の伝統と

文化の理解は書道Ⅱ～Ⅲに示されただけであったが、このたびの改訂でこれらを書道の科目全体に広げ、重点化している。

この目標を承けた書道Ⅰから書道Ⅲまでの鑑賞の指導事項は、①書の伝統と文化の指導、②日常生活における書や書の現代的意義の指導、③鑑賞方法の指導の3点に整理できる。①は日中書道史の領域に関わる内容だけでなく、世界各国の文字文化における書道の位置づけや、思想・仏教・文芸・美術・工芸・政治・経済・宗教・文化といった書をめぐる諸文化にも着眼した指導が示されている。②は中学校国語科書写との系統性を踏まえつつ日常生活における書に親しみ（書道Ⅰ）、それをもとに書の現代的意義の理解（書道Ⅱ・書道Ⅲ）へと展開するものであり、漢字仮名交じりの書の指導事項と深く関連している。③は直感的鑑賞（書道Ⅰ）、分析的鑑賞（書道Ⅱ）、総合的鑑賞（書道Ⅲ）と段階的、複層的な鑑賞方法によって指導することが提起されている。現行指導要領の変更点として、①は日本及び中国の文字と書の伝統、漢字の書体の変遷、仮名の成立等の理解（書道Ⅰ）、表現方法や形式等の理解（書道Ⅱ）、書論の講読（書道Ⅲ）が新たに加えられている。②・③はほぼ現行指導要領を踏襲するが、書道Ⅰで「見ることを楽しむ」工夫を求め、従来書道Ⅱ・書道Ⅲの漢字仮名交じりの書で指導することになっていた名筆の鑑賞を書道Ⅰにも加えている。

内容の取扱いに当たっては、中学校国語科書写との系統性を意識した指導（書道Ⅰ）、表現と鑑賞を有機的に関連づけた指導（書道Ⅰ～Ⅱ）、言語活動の充実を図る指導（書道Ⅰ～Ⅲ）が指摘されている。中学校国語科書写との系統性は現行学習指導要領でも考慮されてきたが、このたびの改訂で明文化されている。また、言語活動の充実は新規に加えられたものであり、新学習指導要領で最も重視されているものである。総則や各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱いでも繰り返し言及されており、『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力の育成に向けて～【高等学校版】<sup>8)</sup>』（2012, p. 15.）に具体的な事例が掲載されている。また、各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱いは、上掲の言語活動の充実に加え、学校図書館、文化施設、社会教育施設、地域の人材や文化財等の活用、コンピュータや情報通信ネットワークなどを生かして生徒の興味・関心を高める工夫をした指導が求められている。言語活動の充実以外は現行学習指導要領を踏まえたものである。

また、新学習指導要領の評価に関しては、生徒の学習状況を分析的に捉える観点別学習状況の評価と総括的に捉える評定とを、目標に準拠した評価として実施することとされている。芸術科書道の観点別評価の観点には、「書への関心・意欲・態度」「書表現の構想と工夫」「創造的な書表現の技能」「鑑賞の能力」があり、鑑賞の評価規準に盛り込むべき事項として、「関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」が示されている。「関心・意欲・態度」は、「書の創造的活動の喜びを味わい、書の伝統と文化に関心をもって、主体的に表現や鑑賞の創造的活動に取り組もうとする。」、「鑑賞の能力」は、「文字や書の伝統と文化について幅広く理解し、その価値を考え、書のよさや美しさを創造的に味わっている。」ことがその趣旨である。

## 2 水戸二高芸術科概要と鑑賞指導の「試案」

### 2-1 水戸二高の概要と書道Ⅱの試案について<sup>9)</sup>

水戸二高は、明治33年(1900)4月1日に茨城県高等女学校として、旧弘道館等に仮校舎を設置して発足した。現在は全日制課程普通科の高等学校であり、1クラスあたり平均40名在籍、各学年8クラスである。2学期制で在籍生徒はすべて女子である。水戸二高の芸術科は音楽・美術・書道の3領域より構成され、1年次は2単位で選択必修科目(書道Ⅰ)、2年次は2単位で文系クラスの選択必修科目(書道Ⅱ)、3年次は2単位(もしくは4単位)で選択科目(書道Ⅰもしくは書道Ⅲ)として位置づけられており、基本的に2時間連続の授業形態を取る。下田を含めて書道教員は2名で、ともに国語科と兼務している。

平成22年度より、下田は書道Ⅱを担当し、2年2・3組(35名)、4・5組(33名)の各合併2クラスによる授業を展開している。前述のように、新学習指導要領は平成25年度生から年次進行により段階的に適用されるため、水戸二高でも平成25年度の書道Ⅱは、現行学習指導要領及びそれに従った評価で運用されている。そこで、平成26年度以後の運用のために、これまでの水戸二高での実践を踏まえ、新学習指導要領や評価に基づく表現と鑑賞を有機的に結びつけた試案1と、特に鑑賞のための時間を設定した試案2を作成した。詳細は巻末を参照されたい。

## 2-2 試案1—「小臣餘犧尊」を臨書しよう(『書道Ⅱ』, 東京書籍, p. 47.)

本題材は、篆書の学習指導(全14時)における「小臣餘犧尊」を臨書しよう(第7~8時)を取り上げたものである。本時は篆書の基本線(第1~2時)や小篆(第3~6時)の授業を承け、小篆以前の篆書である金文(第7~10時)や甲骨文(第11~14時)に展開する導入として位置づけられる授業である。水戸二高の書道選択者が主体的に取り組めるように、書道Ⅱでは、ここ数年間前期に、漢字の書の指導事項を踏まえて篆書と篆刻の授業を行ってきた。書道Ⅱを選択した多くの生徒が楷書やその書き方を踏まえた行書を中心に学び、それらの基礎的・基本的な知識や技能が身に付いている。特に、書道Ⅰでの表現の指導は中学校国語科の書写との系統性を踏まえる必要があり、漢字の書で主として指導の対象となるのは、中学校までに学習する楷書及び行書である。書塾等に通い毛筆に習熟している生徒は漢字の書に対して容易に取り組むが、時に惰性的になる傾向にあった。一方、消極的に書道を選択した生徒の多くは、書道に対して苦手意識がある。そこで、こうした現状を踏まえ、既習事項を踏まえるだけでは表現や鑑賞することができず、字形や技法が特殊な篆書<sup>10)</sup>を導入期の題材としてきた。篆書

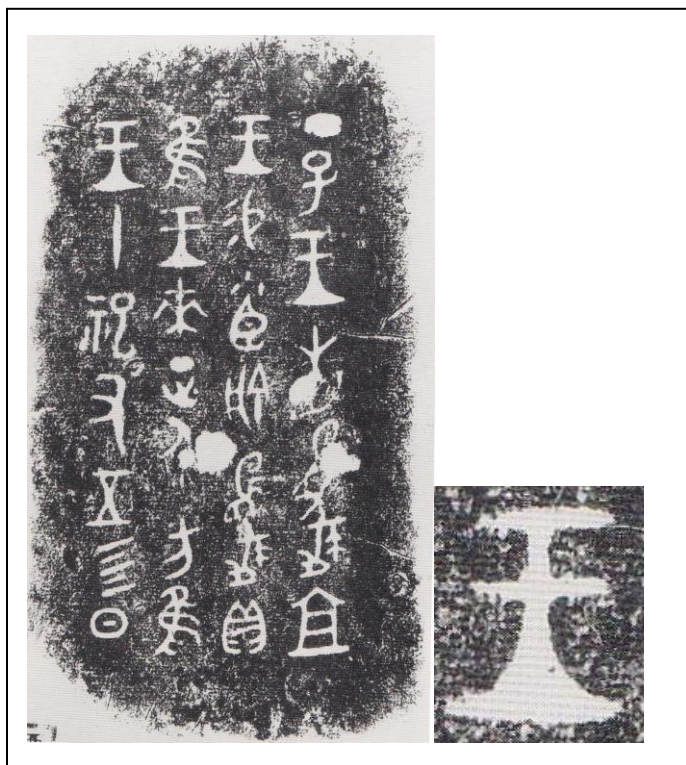


図1 「小臣餘犧尊」

「王」字(部分)

の生徒が楷書やその書き方を踏まえた行書を中心に学び、それらの基礎的・基本的な知識や技能が身に付いている。特に、書道Ⅰでの表現の指導は中学校国語科の書写との系統性を踏まえる必要があり、漢字の書で主として指導の対象となるのは、中学校までに学習する楷書及び行書である。書塾等に通い毛筆に習熟している生徒は漢字の書に対して容易に取り組むが、時に惰性的になる傾向にあった。一方、消極的に書道を選択した生徒の多くは、書道に対して苦手意識がある。そこで、こうした現状を踏まえ、既習事項を踏まえるだけでは表現や鑑賞することができず、字形や技法が特殊な篆書<sup>10)</sup>を導入期の題材としてきた。篆書

は書塾等の経験を持つ生徒でも未経験のことが多く、苦手意識がある生徒とともに、新鮮な気持ちで、かつ主体的・意欲的に学習活動が展開できる題材といえる。

また、新学習指導要領では、表現と鑑賞の相互の関連を図る指導が求められているが、篆書はそれを実践する上で取り組みやすい題材と考えている。次の試案1は、半紙を四等分にし、「小臣餘犧尊」(図1)に見える「隹」「王」の2字を臨書するものである(第7・8時)。教科書には臨書・鑑賞の要点として「起筆や収筆がやや細くなった紡錘形の点画に注意し、肥筆の書き方にも慣れるようにしましょう<sup>11)</sup>。」とあるが、ここに示された特徴は小篆以前の金文で特に西周初期までの金文に顕著に見られるものであり、これらの字形は字源に基づく象形性が現れたものといえる<sup>12)</sup>。例えば「王」字について、白川静は、「戊(鉞<sup>えつ まきかり</sup>)の刃部を下にしておく形。王位を示す儀器として用いた儀礼用の鉞で、その遺器と思われるものがある。……王・皇・父・土はみな征伐権・支配権・指揮権を示す象徴的な儀器で、わが国の古代に銅劍・銅鉞など非実用的な儀器が、その権威の象徴として用いられたのと似ている<sup>13)</sup>。」と解釈する。「王」字には諸説あるものの、白川説に従えば「小臣餘犧尊」などに見える肥筆は鉞の刃部であり、王権の象徴として解することができる。この例でも明らかなように、鑑賞指導における字源を含めた文字の理解は、上掲の紡錘形や肥筆などの表現に直結するものといえる。またそれだけにとどまらず、漢字の構造自体には文字体系の成立した時代の生活と思惟のあり方がそのままに反映されており<sup>14)</sup>、文字が成立した当時の時代や風土、あるいは中国の書の歴史や文化なども学ぶことができる。

さらに、篆書は分析的鑑賞の理解を深め、その態度を養う題材としても有用である。「小臣餘犧尊」の「王」字(図1)を例に挙げると、生徒が分析的鑑賞態度によって臨書しなければ、楷書と同じように「王」字の肥筆の見られる横画(楷書でいう4画目)を上上の2本の横画に比べて長く臨書し、同様に、3本の横画の間を均等に臨書する傾向にある。分析的態度によって臨書すれば、前者については外形の縦横比が3対2の長方形に作るため肥筆の見られる横画を長く臨書することは考えられず、また後者に関しては3本の横画のうち上と中の2本の横画の間を狭く、中と下の2本の横画の間を広くすることが分かるはずである<sup>15)</sup>。このように篆書の字形はこれまでに生徒が身に付けてきた楷書の字形概念によっては把握できず、分析的鑑賞に基づかなければ臨書できないものである。

授業の展開の工夫としては、生徒が授業で何を学ぶのかを明確に理解するために、毎時配付するワークシート(表1)の「評価項目」にそれを明示することになっている。この評価項目はおもに「創造的な書表現の技能」に関するものであり、その評価規準を生徒に理解しやすい形で提示したものである。このような評価項目を提示することで学ぶ目的をしっかりと把握することができるようになる。また、このワークシートは毎時の授業で用い、評価項目も授業の進度によって適宜変更し、基礎的・基本的なものについては、その評価項目を繰り返し提示して定着させるようにしている。また、評価項目の下部には「自身の評価」と「先生の評価」欄を設け、次の5段階によって評価を書き入れるようにしている。

- 5 望ましい水準において極めて高い水準を獲得した場合
- 4 望ましい水準において高い水準を獲得した場合
- 3 望ましい水準において一定の水準を獲得した場合
- 2 望ましい水準にやや及ばない水準である場合



評価項目		自身の評価	先生の評価
一 筆遣い(筆法)			
① 始筆は蔵鋒にできたか		4	4
② 送筆は直筆(中鋒)にできたか		4	5
③ 始筆や収筆の部分で細くなっているところは注意してかけたか		3	5
④ 終筆は筆を引き上げるように書けたか		4	5
⑤ 筆の方向の転換はうまくできたか		3	5
二 字形			
⑥ 字形は縦長(二対一)にできたか		4	5
⑦ 線と線の間は均等に空けられたか		4	5
三 文字の配置			
⑧ 文字は紙の中心に配置されているか		4	5
⑨ 二字の字形のバランスはとることができたか		3	5
○感想			
ニフの文字のバランスのとおり方がむずかしかった。思っていたより「王」の斧をイメージしたところで苦戦した。「獲」の意味を何日始めて知って驚いた。			
とてもバランスよくかけており、なかなか傑作です。			

表1 ワークシートの参考例(平成25年度)

1 望ましい水準の項目において未達成である場合

生徒は毎時の授業でこのような自己評価や他者評価を繰り返し行うことで分析的鑑賞の視点を身に付けることができ、それと同時に今後どのような点に注意して学習すべきかという生徒自身の学習の改善を図る契機となり、生徒が主体的、積極的に授業に取り組むようになることが期待される。また、単に5段階の評価を行うだけでなく、それには反映できなかった毎時の授業の取り組みや授業中できなかった質問・意見などを「感想」欄に書き入れるようにしている。このように学習活動を言語化することによって、言語活動の充実にも配慮している。また作品やワークシートを含めた学習の記録を整理したポートフォリオ(B4版のクリアファイル)を活用し、生徒自身の学びを振り返らせる工夫もしている。

また、教科書の「字形と筆順」のコラムには掲載図版の文字の一部の筆順が示されているが、当時の人々がどのような筆順で書き、肥筆をどのように表現したのかは定かではない。そこで、筆順や肥筆について議論・発表する場を設定し、言語活動の充実を図っている。このように字形や線質の表現効果を探求して古典を迫体験していく活動は、表現を工夫し、その幅を広げることにつながる。また、表現と鑑賞を有機的に結びつけるために、毎時5~10分程度を鑑賞指導の時間に割り当て、生徒に表現と鑑賞が関連していることを意識させる工夫も行っている。

2-3 試案2—美術館で書道の作品を鑑賞しよう(自主教材)

茨城県教育委員会では、平成23年度から平成27年度までの5カ年を計画期間とする新しい教育計画を策定し、今後の方向性として県立美術館・博物館を文化芸術活動の拠点、生涯学習の中核施設の一つとして位置づけ、学校との連携を強化し、その利活用の促進を掲げている<sup>16)</sup>。こういっ

た背景も踏まえ、茨城県立近代美術館・水戸芸術館等の近隣に位置する水戸二高の芸術科では、各施設と連携し、前期・後期で計4～8時間程度、展示内容などを鑑みながら不定期ではあるが、特に鑑賞のための時間を設定している。その際、ワークシートの記述や授業の取り組みによって評価してきた。また、展示内容によっては、音楽や美術領域の生徒との合併授業を展開することもあった。水戸二高の授業の実践は、学習指導要領の各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱いにおける学校図書館、文化施設、社会教育施設、地域の人材や文化財等の活用を踏まえたものであり、新学習指導要領が目指すところとも合致している。そこで、この実践事例を踏まえながら、近年では1～2月に開催され、現在活躍中の茨城の作家の日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書、写真、デザインを展示する現代茨城作家美術展(於 茨城県立近代美術館)に焦点をあてた試案2を示したい。

本題材は特に鑑賞のための時間を設定し、生涯学習を視野に入れた点に特色がある。新学習指導要領の目標である生涯学習を視野に入れていることを鑑みれば、前掲の萱論考に見えるように、表現と有機的に関連した鑑賞指導のほか、生涯学習を見据えた鑑賞の能力の育成も重視する必要がある。すなわち、高等学校の書道の授業から離れて筆を持たなくなっても、美術館等に出向いて書芸術に触れるというような生涯にわたり書道を愛好する心情を育てるには、まずは「書をどのように見ればよいのか。」という鑑賞の能力を育まなければならないからである。

また、ワークシートやレポートの作成、あるいは作家へのインタビューといった言語活動の充実を図った点にも特色がある。鑑賞シート(表2)には、全体構成、字形、文字の大小、余白、墨の濃淡・潤渇といった分析的鑑賞をもとに書のもつよさや美しさを言葉で表現する活動を取り入れた。また、現代茨城作家美術展には学芸員だけでなく、出品者も輪番で会場当番に当たっている。そこで、学芸員の解説を聞き、筆者にインタビューをして、筆者の表現意図、表現方法や表現形式の工

<b>鑑賞シート</b> 二年「組」 番氏名「				
1 第一印象で好きになった作者名と作品を挙げよう。				
2 次に挙げる点を参考にして、1の作品が好きになった理由を具体的に書こう。 ①全体構成 ②字形 ③文字の大小 ④余白 ⑤墨の濃淡・潤渇				
3 学芸員の説明を整理してみよう。				
4 次の点に注意して、筆者にインタビューしてみよう。 ①表現意図 ②表現方法や表現形式の工夫				
5 本日の授業の感想を書こう。				

表2 鑑賞シート

夫について尋ねる場を鑑賞シートに設定した。生徒にとっては教室の中では関わることのできない地域の人々と交流することは新鮮であり、主体的に鑑賞活動に取り組むことができる場であると考える。そして、本日の学習内容の振り返りの場として、鑑賞シートに基づきながら「今回の展覧会を観て書道をどのように考えましたか。」「またあなたにとっての書道とは何ですか。」というような、書の現代的意義に関するレポートを書く場面を設定した。

今回は茨城県立美術館について取り上げたが、このほかにも水戸二高の周囲には鑑賞指導に適した文化的施設や地域の文化財が多くある。上掲の茨城県立美術館や茨城県立歴史館・茨城県立図書館では肉筆書跡の展示、書を含む美術展、茨城県とゆかりの深い書画の展示が企画展ないしは常設展として催され、単に見学だけでなく、学芸員や作家による解説やワークショップ等を活用することもできる。さらに、弘道館公園・偕楽園公園といった地域の文化財等には江戸時代以来の碑石を見ることができ、特に弘道館には北澤家の店舗があり、「水戸拓」及びその版木を観察することもできる。なお、日本画は、卷子や掛け軸、画賛や落款印などの表現形式は書と共通する内容もあり、鑑賞教材として有用である。今後は、試案2をもとに周辺の文化的施設や地域の文化財を弾力的に活用していきたいと考えている。

### 3 高等学校芸術科書道の鑑賞指導を大学の授業に生かす試み

#### 3-1 茨城大学教育学部における高校書道授業受講者の実態

高等学校芸術科書道で鑑賞に関する学習指導が求められており、教員養成の書道授業でも、この点をふまえ、鑑賞指導の大切さを実感させ、その指導のあり方を考えさせる働きかけが重要である。

茨城大学教育学部では、高校芸術科書道関係科目が、主に国語専攻生3年次向けに開講されている。受講者数にばらつきがあるが、文字を書くことが好きである、高校書道の免許もとっておきたい、といった理由から、毎年10名程度の学生が高校書道の教育法の授業を受講する。このうち、高校書道選択学生は1～2名で、ほとんどが書道を選択しなかった学生である。初回授業時に小中学校及び高等学校での書写書道に関する思い出などを聞いてみると、書道に興味があったが選択できなかった、毛筆は苦手だが教員にとって整った文字を書くことが大事だと思うので受講したといった回答があり、意欲的に授業に取り組んでいる。

#### 3-2 茨城大学教育学部における高校書道関係授業で鑑賞指導を充実させる取り組み

高校での書道授業体験がない学生に、鑑賞指導のあり方を学ばせるためには、学習者である高校生の実態をふまえ、鑑賞指導のねらいやその具体的な方法について学べるよう、配慮が必要である。そこで、実践的に学ばせるために、平成24年度から、鑑賞学習の方法について下田が授業を担当し、共同で検討を行ってきた。その際、学習者の実態について理解させるには、大学生が学習者となる模擬授業を行い、どのように指導するべきかを考えさせる形式に成果が得られることがわかった。平成25年度の下田が担当する授業では、前半に鑑賞指導に関する基礎知識を習得し、後半に模擬授業により体験的に学ぶ、という授業を行い、授業後の感想を次のように整理することができた。



①学習指導要領に対応することも含め、書道に関する知識を習得できたというもの

- 書道の授業を高校で受けたことがなかったので、新鮮でとても楽しかったです。文字の成り立ちや中国でのお話など、発見があったからおもしろく感じたのだと思いました。
- 前半の授業では、知らないことがたくさんあり、新しい知識を得ることができて良かったです。
- 篆書は初めてだったのでとても新鮮でした。「王」という字について考えたことがなかったので、面白いと思いました。字形をみるのが歴史をみることだと気付きました。
- 書道が苦手な私でも集中して書けて、楽しく学ばせていただくところがたくさんありました。

②模擬授業を受けて、書道の授業に興味を持てたというもの

- 楷書が好きで、いつも整った字を書きたいと思っていたのですが、今回篆書を書いてみて、このような「字らしくない字」を書いてみるのも、とても勉強になり、楽しいと思えるようになりました。書道をよりいっそう身近に感じられる授業でした。
- 各学年の生徒が興味を示すことができるような話題をたくさん持つようにしたいと思います。難しいことばかりではなく、自然とその課題に入って集中できるような授業で本当に楽しかったです。
- 書道の授業を展開するにあたっては個人の技術だけでなく、知識やそれをどう生徒に行わせるか、ということも大切なのだと改めて思いました。
- 「帯」が書道ではとても大切という話を学校の教員になったら強く意識したいと思います。
- 実際に高校の授業を体験して、一人で黙々と作業をこなすのではなく、書きあげたものを共有して「学び」につなげていくことの楽しさを知ることができ、実習の際に役立てられたらよいと考えています。書いてばかりの授業はマンネリ化してしまうので、視聴覚教材や実物に触れる機会を作って、五感に響く授業にできるよう今後も学習していきたいです。
- （前略）高校では、書道の選択も可能でしたが、毛筆が苦手なため、美術がそれなりに好きで得意だったので、一度も毛筆に触れることがありませんでした。大学に入って初めて、書道に興味を持ちましたが、やはりコンプレックスに感じていました。今日の「あやしい文字」は、皆が初めて書く文字だったということもあり、あまり気負いせずに書いて楽しむことができました。実際に高校でもこうした授業をされているとのことで、これなら初心者も経験者も皆で平等に楽しむことができるのだと実感しました。
- 実技に関しては、ただ手本を見て書くだけでなく、そこからスタートして、お互いを評価したり、理由を考えてみたり、歴史とからめるなどして、学習者の興味を引く工夫をすることが大切だと思った。練習→清書→提出といった一辺倒な授業展開ではなく、いろいろな方向からアプローチして楽しさを含ませることが、書道の授業にも必要だと感じた。

③鑑賞指導の意義を実感したというもの

- 鑑賞に苦手意識があったのですが、実際にやってみると、それほど苦痛ではなく、他の人の作品を見る楽しさを知りました。今まではあまり他の人の作品には、興味はなかったのですが、これから機会があれば、学生の展示にも足を運んでみようと思います。
- 書道の授業の中でも、言語活動が重要視されていることが分かり、さまざまな教科でことばを

通り、人と関わることが求められていることや、形として表現することだけでなく、表現されたものを鑑賞する活動も重視されていることもわかりました。先生の「価値の多様性」というお話が心に残りました。「美しい」と感じるそのことが、一定の基準に定まっているのではないと気づき、他の人の価値観も自分の価値観も認めていけたらよいと、思いました。

- 高校書道では鑑賞も重視するとのことですが、書道のイメージはとにかく書く、という感じでした。しかし、鑑賞することで、書道の奥深さや面白さを実感として理解するためにはとても良いことだと感じました。また、その鑑賞も直観から分析へと移行していくことによって、「考える」という力を付けることができるので、良いものだと思います。ただ、それを授業者として展開していくためには、知識はもちろん、自身がまず、「考える」ことをしなければいけないので大変なことのような気がします。が、やりがいがありそうで、やる気も沸いてきました。
- 指導要領改訂で、鑑賞や言語活動の充実をはかるということが課題で、その実施の難しさ、また工夫の多様性を学ぶことができたと思います。

以上の学生の記述から、模擬授業で学習者を体験することで、書道授業における鑑賞指導のあり方や言語活動を取り入れていくこと、そのためにも多様な展開ができる指導者になることが大事で、自ら知識や技能を深めていく必要があること、を実感していることがわかる。学生のほとんどが書道の授業は書くことのみ、という印象を持っていたことは、本稿冒頭で引用した今井、萱が指摘する、鑑賞指導を通じた書の「受け手」の養成の必要性を裏づけるものであり、大学の授業においても、いっそう配慮が必要である。今回の取り組みは試案の段階であるが、高大連携と大学の授業改善にもつながる取り組みとなった。

## おわりに

本稿は、芸術科書道における鑑賞指導の現況を踏まえ、その改善を期して、新学習指導要領における鑑賞指導と評価について整理した上で、下田が勤務する水戸二高の芸術科の概要と新学習指導要領に基づく鑑賞指導の試案について提示し、それに関する高大連携のあり方について報告した。

まず、新学習指導要領における鑑賞指導と評価のあり方について整理し、水戸二高でのこれまでの実践を踏まえながら、書道Ⅱにおける鑑賞の評価規準について新学習指導要領や解説をもとに設定し、平成26年度以後に運用する表現と鑑賞を有機的に結びつけた試案1「「小臣餘儀尊」を臨書しよう」（『書道Ⅱ』、47頁、東京書籍）と特に鑑賞のための時間を設定した試案2「美術館で書道の作品を鑑賞しよう」（自主教材）を提示することができた。

次に、高大連携と大学の授業改善の取り組みとして、学生が学習者となり、どのように鑑賞指導を行うべきかを考えさせていく模擬授業を行い、学生の感想からその成果を確認することができた。また、大学の授業においても書の「受け手」の養成を意識する必要があることが明らかとなった。

## 注

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』（教育出版，2009，以下「解説」），p. 3.
- 2) 加藤達成監修『書写・書道教育史資料』3（東京法令出版株式会社，1984）pp. 234-270.
- 3) 今井凌雪（潤一）「現代書への提言—受け手の養成—」（『書を志す人へ』，二玄社，1976），pp. 14-15.
- 4) 久米公「書写書道教育要説（22）」（『書道研究』3月号，萱原書房，1989），pp. 116-125，同「書写書道教育要説（28）」（『書道研究』11月号，萱原書房，1989），pp. 115-125.
- 5) 萱のり子「表現と鑑賞の架橋—書の実践を通しての鑑賞教育に関する考察—」（『美術科研究』22，大阪教育大学・美術教育講座・芸術講座，2005），pp. 33-52.
- 6) 鈴木慶子・鶴谷和身・和田圭壯「書道の授業における鑑賞活動に関する一試行—高等学校の「仮名」単元を中心に—」（『長崎大学教育学部紀要 教科教育学』33，1999），pp. 1-15，片山智士・大森アユミ「書道教育における鑑賞指導の研究～自ら学び自ら考える力の育成を目指して～」（『福岡教育大学紀要』50 第5分冊，2001），pp. 119-134，矢野敏文・今野康典「「生きる力」を育む鑑賞指導—高校書道における導入法試論—（その1）」（『北海道教育大学紀要 教育科学編』49-2，1999），pp. 91-106，同「「生きる力」を育む鑑賞指導—高校書道における導入法試論—（その2）」（『北海道教育大学紀要 教育科学編』50-1，1999），pp. 137-146，和田圭壯・勝目浩司・秋元正成・李峰・百田千加代「書道教育における鑑賞指導の一考察—分析的鑑賞を中心として—」（『教育実践研究』15，福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター，2007），pp. 57-64，和田圭壯・勝目浩司・服部一啓「「書道Ⅰ」における鑑賞指導の一考察—直感的鑑賞を中心として—」（『教育実践研究』17，福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター，2001），pp. 51-59，東京学芸大学附属高等学校（文責 荒井一浩）「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ書道学習」（『中等教育資料』891，ぎょうせい，2010）pp. 57-64，萱のり子「書のある作品を用いた鑑賞授業」（『美術教育』296，日本美術教育学会学会誌編集委員会，2012），pp. 34-40.
- 7) 新学習指導要領の芸術科書道に見える鑑賞指導や評価については，前掲注1）『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』及び国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 芸術〔書道〕】』（教育出版，2012）に基づく。
- 8) 文部科学省ホームページ参照。該著の小学校版，中学校版は書籍化されているが，目下高等学校版は書籍化されていない。
- 9) 以下，水戸二高の概要は，『平成25年度学校要覧』（茨城県立水戸第二高等学校，2013）に基づく。
- 10) 篆書については西川寧「篆書の書法」（『書道講座』5，二玄社，1972），pp. 6-25，参照。
- 11) 『書道Ⅱ』（東京書籍株式会社，2013 検定済），p. 47，現行の教科書とも共通する。
- 12) 肥筆に関しては，中村伸夫「戦国楚簡の文字にみる〈肥筆〉に関する一考察—《老子》乙編を主材料として—」（『書法漢学研究』2，2008），pp. 1-8，参照。
- 13) 白川静『字統普及版』（平凡社，1994），pp. 62-63.
- 14) 白川静「字統の編集について」（前掲注 13）『字統普及版』），pp. 1-21.

- 15) 陳初生『金文常用字典』第2版(陝西人民出版社, 2004), p. 40, に, 「金文則作等長的三書, 中豎上下均不出頭, 第二橫在第一第三橫間之正中, 与王字中橫偏上有別。」とあり, 3本の横画の間の差異によって「王」字と「玉」字と区別すると指摘する。
- 16) 『いばらき教育プラン～一人一人が輝く教育立県を目指して～』(茨城県教育委員会, 2011), pp. 126-127.

#### 図版出典

図1 「小臣觶犧尊」(ブランデーコレクション, 『中国法書選』1, 二玄社, 1990), p. 28 .

#### 附記

本稿の図版は二玄社のご厚意によって掲載することができた。また英文タイトルについては土屋幸子先生のご教示を賜った。記して御礼申し上げたい。

試案1—「小臣餘糧尊」を臨書しよう（『書道Ⅱ』、東京書籍、p.47.）

(1) 学習活動に即した評価規準

書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
<p><b>表現 関①</b> 金文の書風に即した用筆・運筆に関心を持ち、表現力を高めようとしている。</p> <p><b>表現 関②</b> 金文の持つ美や画や線質の技法に関心を持ち、表現の幅を広げようとしている。</p> <p><b>表現 関③</b> 半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、工夫しようとしている。</p> <p><b>鑑賞 関④</b> 金文の表現効果を直感的に味わい、その美の持つ造形的要素を分析的に把握しようとしている。</p> <p><b>鑑賞 関⑤</b> 金文の書かれた時代や背景などに興味を持ち、意欲的、主体的に理解しようとしている。</p> <p><b>鑑賞 関⑥</b> 中国の書道史や文化史における金文の位置づけを理解しようとしている。</p>	<p><b>構①</b> 金文の書風に即した用筆・運筆を理解し、その表現を工夫している。</p> <p><b>構②</b> 金文の持つ美を感受し、それを追体験することで表現の幅を広げようとして工夫している。</p> <p><b>構③</b> 半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、表現の幅を広げようとして工夫している。</p>	<p><b>技①</b> 金文の書風に即した用筆・運筆を身に付け表している。</p> <p><b>技②</b> 金文の点画や線質の技法に習熟し、効果的な表現技法を身に付け表している。</p> <p><b>技③</b> 半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、身に付け表している。</p>	<p><b>鑑①</b> 金文の表現効果を直感的に味わい、その美の持つ造形的要素を分析的に把握している。</p> <p><b>鑑②</b> 金文の書かれた時代や背景などを理解している。</p> <p><b>鑑③</b> 中国の書道史や文化史における金文の位置づけを理解している。</p>

(2) 指導と評価の計画（第7・8時）

時間	学習のねらい、学習活動 ※「●」は、学習のねらい 「○」は、学習活動	学習活動に即した評価規準				評価方法・留意点
		書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力	
7・8	<p>●文字の成り立ちや金文（「小臣餘糧尊」）の表現技法を理解した上で、半紙に応じた紙面構成を工夫して臨書する。</p> <p>○中国書道史や文化史上の金文の位置づけを理解する。</p> <p>○「王」「隹」の字源と字形との関係から金文の書かれた時代や背景などを理解する。</p> <p>○金文の用筆や運筆について議論し、点画や線質の技法、紙面構成を工夫して臨書する。</p> <p>○本日の授業の取り組みを振り返る。</p>	<p>関⑥</p> <p>関⑤</p> <p>関① 関② 関③</p> <p>関⑤ 関⑥</p>	<p>構②</p> <p>構① 構② 構③</p>	<p>技②</p> <p>技① 技② 技③</p>	<p>鑑③</p> <p>鑑②</p> <p>鑑①</p>	<p>ワークシート・観察によって評価する。</p> <p>作品・ワークシート・観察によって評価する。</p> <p>作品・ワークシート・観察によって評価する。</p> <p>作品・ワークシートによって評価する。</p>



(3) 「学習活動に即した評価規準」及び「十分満足できる」状況(A)の具体例と「努力を要する」状況(C)とした生徒の指導の手立て

学習活動に即した評価規準	◎「十分満足できる」状況(A)と判断した具体例 ■「努力を要する」状況(C)と判断した生徒への手立て
<b>&lt;書への関心・意欲・態度&gt;</b>	
<b>表現 関①</b> 金文の書風に即した用筆・運筆に関心を持ち、表現力を高めようとしている。	◎金文の書風に即した用筆・運筆に関心を持ち、表現力を意識的に高めようとしている。 ■実践や資料等を交えて用筆や運筆が書風を形成するための基本であることに関心を持たせる
<b>表現 関②</b> 金文の持つ美や画や線質の技法に関心を持ち、表現の幅を広げようとしている。	◎金文の持つ美や画や線質の技法に関心を持ち、意欲的に表現の幅を広げようとしている。 ■小篆との比較によって、意欲的に金文のよさや美しさを感じ取るようにする。
<b>表現 関③</b> 半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成に関心を持ち、表現の工夫に取り組もうとしている。	◎半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解した上で、工夫を重ねながら意欲的に表現に取り組んでいる。 ■具体的事例を示しながら、紙面構成によって表現効果が高まることに関心を持たせる。
<b>鑑賞 関④</b> 金文の表現効果を直感的に味わい、その美の持つ造形的要素を分析的に把握しようとしている。	◎金文の表現効果を直感的に味わった上で、主体的にその造形的要素を分析的に把握し、書のよさや美しさを創造的に味わっている。 ■金文に触れた時に感じる第一印象を大切にし、作品のよさを美しさを根拠を持って批評できる態度を養う。
<b>鑑賞 関⑤</b> 金文の書かれた時代や背景などを理解しようとしている。	◎金文の書かれた時代や背景などに興味を持ち、意欲的に主体的に理解している。 ■金文の書かれた時代や背景などに関する資料等によって、理解が深まるようにする。
<b>鑑賞 関⑥</b> 中国の書道史や文化史における金文の位置づけを理解しようとしている。	◎中国の書道史や文化史に興味を持ち、その中の金文の位置づけについて深く理解している。 ■中国の書道史や文化史に関する資料等によって、理解が深まるように促す。
<b>&lt;書表現の構想と工夫&gt;</b>	
<b>構①</b> 金文の書風に即した用筆・運筆を理解し、その表現を工夫している。	◎金文の書風に即した用筆・運筆を理解し、その表現を工夫し、書の表現力を伸ばしている。 ■金文の特徴的な点画の用筆や運筆を示すことによって、理解を促し、工夫できるようにする。
<b>構②</b> 金文の持つ美を感じ、それを追体験することで表現の幅を広げる工夫をしている。	◎金文のよさや美しさを感受し、それを追体験することで個性的な表現ができるように工夫している。 ■小篆と比較することで金文のよさや美しさを感じ取り、表現の工夫につなげるように促す。
<b>構③</b> 半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、表現の幅を広げよう工夫している。	◎半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、表現効果を確かめながらその幅を広げよう工夫している。 ■字形の構成から全体の構成へと段階的に表現の工夫ができるように促す。
<b>&lt;創造的な書表現の技能&gt;</b>	
<b>技①</b> 金文の書風に即した用筆・運筆を身に付け表している。	◎金文の書風に即した用筆・運筆に関心を持ち、主体的に表現力を高めている。 ■筆管の傾き、書字の姿勢、穂先の動かし方、腕の使い方などに着目するように促す。
<b>技②</b> 金文の点画や線質の技法に習熟し、効果的な表現の技法を身に付け表している。	◎金文の点画や線質の技法に習熟し、効果的な表現技法を身に付け、意図する線質や表現の幅を広げている。 ■始筆・終筆の紡錘形や肥筆といった金文の点画の特徴、直筆と側筆の線質の違いを理解できるようにする。
<b>技③</b> 半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、身に付け表している。	◎半紙に応じた字形や文字の配置といった紙面構成を理解し、それを工夫することで表現の幅を広げている。 ■字形は文字の対称性に着目させ、紙面構成は半紙に折り目などの目印を付けて理解を促す。
<b>&lt;鑑賞の能力&gt;</b>	
<b>鑑①</b> 金文の表現効果を直感的に味わい、その美の持つ造形的要素を分析的に把握している。	◎金文の表現効果を直感的に味わい、その美の持つ造形的要素を主体性をもって分析的に把握している。 ■分析的に把握できない生徒には、資料等を参考にして、造形的要素を示す言葉を確認するように促す。
<b>鑑②</b> 金文の書かれた時代や背景などを理解している。	◎金文の書かれた時代や背景などを積極的に理解している。 ■時代や背景などを資料等を参考にして確認するように促す。
<b>鑑③</b> 中国の書道史や文化史における金文の位置づけを理解している。	◎中国の書道史や文化史における金文の位置づけを意欲的に理解している。 ■中国の書道史や文化史などを資料等を参考にして確認するように促す。



試案2—美術館で書道の作品を鑑賞しよう（自主教材）

(1) 指導と評価の計画（第1・2時）

時間	学習のねらい、学習活動 ※「●」は、学習のねらい 「○」は、学習活動	学習活動に即した評価規準		評価方法・留意点
		書への関心・意欲・態度	鑑賞の能力	
1・2	<p>●直感的・分析的鑑賞をもとに、書の現代的意義について考える。</p> <p>○現代茨城作家美術展に見られる書作品の一つを選び、直感的・分析的鑑賞を行う。</p> <p>○学芸員の説明を聞いた後、感興や表現意図、表現方法や形式等を筆者にインタビューする。</p> <p>○本日の取り組みを振り返り、書の現代的意義に関するレポートを書く。</p>	<p><b>鑑賞 関①</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現効果を直感的に味わい、その造形的要素を分析的に把握しようとしている。</p> <p><b>鑑賞 関②</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の筆者の感興や表現意図を主体的に洞察しようとしている。</p> <p><b>鑑賞 関③</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現方法や形式等に興味・関心を持っている。</p> <p><b>鑑賞 関④</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品を鑑賞し、書の現代的意義について意欲的に理解しようとしている。</p>	<p><b>鑑①</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現効果を直感的に味わい、その美的持つ造形的要素を分析的に把握している。</p> <p><b>鑑②</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の筆者の感興や表現意図を洞察している。</p> <p><b>鑑③</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現方法や形式等を理解している。</p> <p><b>鑑④</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品を鑑賞し、書の現代的意義について理解を深めている。</p>	<p>鑑賞シート・観察によって評価する。</p> <p>鑑賞シート・観察によって評価する。</p> <p>鑑賞シート・観察によって評価する。</p> <p>鑑賞シート・レポートによって評価する。</p>

(2) 「学習活動に即した評価規準」及び「十分満足できる」状況(A)の具体例と「努力を要する」状況(C)とした生徒の指導の手立て

学習活動に即した評価規準	◎「十分満足できる」状況(A)と判断した具体例 ■「努力を要する」状況(C)と判断した生徒への手立て
<b>&lt;書への関心・意欲・態度&gt;</b>	
<b>鑑賞 関①</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現効果を直感的に味わい、その造形的要素を分析的に把握しようとしている。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現効果を直感的に味わった上で、主体的にその造形的要素を分析的に把握し、書よさや美しさを創造的に味わっている。 ■書作品に触れた時に感じる第一印象を大切に、作品のよさを美しさを根拠を持って批評できる態度を養う。
<b>鑑賞 関②</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の筆者の感興や表現意図を主体的に洞察しようとしている。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品の筆者の感興や表現意図を、インタビューを通じて主体的に洞察しようとしている。 ■インタビューの内容を吟味させ、また生徒間の交流を促すことで洞察できるようにする。
<b>鑑賞 関③</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現方法や形式等に興味・関心を持っている。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現方法や形式等とそれに応じた書法の工夫にまで関心を高めている。 ■表現方法や形式等の実生活との関わりや歴史的背景について確認して興味を喚起する。
<b>鑑賞 関④</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品を鑑賞し、書の現代的意義について意欲的に理解しようとしている。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品を鑑賞し、書の現代的意義について意欲的に自分の意見を書くことができる。 ■構想や着眼点を理解した上で、自分の意見をレポートを書くように促す。
<b>&lt;鑑賞の能力&gt;</b>	
<b>鑑①</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現効果を直感的に味わい、書の美的持つ造形的要素を分析的に把握している。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現効果を直感的に味わい、その造形的要素を主体性をもって分析的に把握している。 ■分析的に把握できない生徒には、資料等を参考にして、造形的要素を示す言葉を確認するように促す。
<b>鑑②</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の筆者の感興や表現意図を洞察している。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品の筆者の感興や表現意図を洞察している。 ■学芸員の説明や筆者のインタビューをもとに、分析するように促す。
<b>鑑③</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現方法や形式等を理解している。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品の表現方法や形式等を積極的に理解している。 ■表現方法や形式等を資料等を参考にして確認するように促す。
<b>鑑④</b> 現代茨城作家美術展に見られる書作品を鑑賞し、書の現代的意義について理解を深めている。	◎現代茨城作家美術展に見られる書作品を鑑賞し、書の現代的意義について理解を深めている。 ■学芸員の説明や筆者のインタビューをもとに、現代における書の意味について考えるように促す。